

5. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その43)】

熱帯性のゴバンノアシの漂着

2004年8月18日、小学生3年生から6年生まで22人が参加して、白浜町の番所崎で町立児童館自然観察教室があった。2003年にはハンドウイルカの全身骨格を子供たちが発見しており、今年も何か新しい発見があるのではと期待を込めてフィールドへ出かけた。円月島の前の浜で、珍しいゴバンノアシの果実が1個見つかった。ゴバンノアシは、1年に何度も漂着することのない南国からの贈り物である。今年の観察会もこれらが見つけれられたのでラッキーだった。(写真：2013年3月中旬、京都大学瀬戸臨海実験所北浜に漂着したゴバンノアシ)



また、沖縄などでみられるモモタマナの実も1個見つかった。モモタマナは、沖縄では樹木によく育っているが、ゴバンノアシは日本には自生しないサガリバナ科の樹木で、東南アジアや環太平洋の島々の海岸に生えて林になっている。実際にその現場を見たことはないが、木の高さ15m、直径1.2mに達するという。果実の形態変異は大きい、和名の通り、碁盤の脚に似ている。

ゴバンノアシは日本では育たない

ゴバンノアシの果実は、筆者らの調査では1996年～1999年の間に北浜へ漂着したのはわずかに6個だけだ。幅68～122mm、高さ45～90mmと、縦長から横長まで色々な形があった。色も茶褐色から灰黒色まで変異する。

ゴバンノアシの外皮の下は、繊維質とコルク質が発達しているので、海水によく浮く構造なのである。本州の太平洋沿岸では、黒潮が遠ざかってゆく千葉県まで流れ着いた記録がある。また、和歌山県では串本町で漂着した記録が報告されている。北浜や番所崎にたどりつくまで、はるか何千 km も旅をして、どこかの浜辺に立ち寄ったり、再び黒潮に乗って沖合を流れたりしながら、はるばる白浜までやってきている。ひょっとしたら、赤道に沿って流れる海流がもっと大元なのかもしれない。ごく最近、フィリピンのミンナダオ島へ生物調査に出かけたが、そこでもヤシの実といっしょに多数のゴバンノアシが流れ着いていた。名も知らぬ遠き島より日本に流れ寄るゴバンノアシひとつに、限りなくロマンチックな物語が込められている。

無効分散

だが、現実には厳しい。せっかく日本に流れ流れてやってきても育たないのだ。たとえ芽を出しても、冬の寒さで日本では1年もたたないうちに枯れてしまうだろう。海中や海岸の生物は、このように、子孫をできるだけあちこちに広げようと海流を活用した努力を絶え間なく実施しているのだが、無駄になることも多い。これを無効分散という。

ごく最近、2013年3月中旬と下旬に、1個ずつのゴバンノアシが漂着した。1個はコルク質むきだしで、皮がすっかりとれていたので、海流に流れ流されながら、どっかへそっかへ漂着を繰り返しての到来だろう。昨今の地球温暖化とはいえ、まだ白浜は熱帯にはなっていないので、せっかくやってきても無駄死になってしまう宿命である。中に実はたしかにまだはいついて、しっかりと守られているので生きていられると思われる。